

戦前 1899–1945 年の近代沿岸捕鯨の事業場と捕鯨船

宇仁義和

Whaling Stations and Whale Catchers of Modern Japanese Coastal Whaling from 1899–1945

Yoshikazu Uni

東京農業大学オホーツクキャンパス unisan@m5.dion.ne.jp

Tokyo University of Agriculture, Abashiri

はじめに

捕鯨にとって最重要な設備は、捕鯨船と解剖などをおこなう事業場である。日本の近代捕鯨の展開を知るうえで、また、地域の歴史を確認する意味からも、これらの設備を具体的に把握することが不可欠であり、その一瞥が捕鯨史研究の基礎資料になると考える。本論は、日本の近代捕鯨のうち大型沿岸捕鯨について、既存の文献を精査することで、日本の近代沿岸捕鯨の事業場と捕鯨船を一望することを目指すものである。

資料と方法

本論で用いた資料は、単行本や統計書、雑誌記事、捕鯨会社の営業報告、そしてアメリカ自然史博物館の学芸員であったロイ・チャップマン・アンドリュース Roy Chapman Andrews 1884–1960 が撮影した写真（宇仁ら 2014、宇仁・加藤編 2017）、およびノルウェー海洋博物館 Norsk Maritimt Museum が所蔵する船体図である。記述の対象期間は、日本遠洋漁業株式会社の設立から終戦までの 1899（明治 32）–1945（昭和 20）年である。

沿岸捕鯨の事業場は設置や廃止が相次ぎ、計画中や許可を取得しただけの場所の図示、ごく短期間で廃止された場所などがある。時系列にそった記述を目指して詳細を述べると繁雑となり、全体の把握がかえって困難になる。そこで、事業場については、東洋捕鯨が設立された 1910（明治 43）年、太平洋戦争の期間中の 1941–1945（昭和 16–20）年、そして対象期間に一度でも操業した事業場、この 3 つについて単行本や論文に掲載された図への加筆によって表現した。本論の貢献は誤記の訂正程度であるが、近年使用可能になった社内文書やインターネット情報などで補完した報告を目指した。なお、本論では、事業場は捕鯨会社の事業所を指し、根拠地は事業場が置かれた地域名として用いている。

捕鯨船については、沿岸捕鯨に安定して用いられた船舶について一覧表を作成した。名称や来歴の収集は『本邦の諾威式捕鯨誌』（明石編 1910）や『捕鯨回顧』（渋谷 1967）、『大洋捕鯨・捕鯨事業の歴史』（徳山 1992）、『捕鯨便覧第一編』（日本捕鯨業水産組合 1943）などを用い、船名と建造地、建造年は通信省『日本船名録』によった。また、詳しい来歴と元船名については「船舶史稿資料編輸入船船舶史第 2 巻（明治後期編）」（船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム編）やカナダ大西洋側のニューファンドランド州の近代捕鯨を詳細に述べた *Twentieth-century Shore-station Whaling in Newfoundland and Labrador* (Dickinson and Sanger 2005) などの先行研究を引用した。単行本などに捕鯨船としての記載があるが、ごく短期間の使用で終わった船については省略した。加えて、アンドリュース

スの写真を用い、解剖方式の変遷について若干の考察を加えるとともに、捕鯨船の煙突に掲げられた捕鯨会社の印、ファンネルマーク **funnel mark** について新たな知見を記し、船体図を収録した。

なお、用いた資料への筆者による注記は [] 内におさめた。

沿岸捕鯨の根拠地の変遷

1910 年に存在した根拠地

日本の近代捕鯨の最初期の操業は、捕鯨船が漁場を回航し、簡易的な陸上基地に横付けした解剖船で解剖して搬出するもので、陸上設備の機能は水や物資の補給などに限られていた。山口県文書館が所蔵する日本遠洋漁業と東洋漁業の営業報告（宇仁 2016a）に掲載された捕獲記録を比べると、日本遠洋漁業は捕鯨船ごとに集計されているのに対し、東洋漁業では事業場ごとに集計され、操業のおもな設備は捕鯨船や解剖船などの船舶であった。

朝鮮での成功を得て、東洋漁業は四国や本州の太平洋沿岸での事業に着手する。まず漁獲試験を始め、1906（明治 39）年 4 月に捕鯨船オルガ丸を長門から房総方面、5 月に同ニコライ丸を房総経由で金華山方面に送った。朝鮮では、蔚山を主力根拠地に定め、年度内に海面埋立てをおこない設備を整備、長箭は予備の根拠地とするとして（東洋漁業株式会社第 2 期報告書 自明治 38 年 8 月 1 日 至明治 39 年 7 月 31 日）。同社が太平洋側で最初に操業を始めた根拠地は、1906（明治 39）年 4 月の千葉県銚子であった。鯨体は地元業者に丸売りする契約を結んだが、実際に鯨体を目の前にするとその業者は当惑していたので直営の解剖設備を置いた（東洋漁業株式会社東京出張所第 1 期事業報告 明治 39 年 4-7 月）。同年 8 月に宮城県鮎川、11 月に和歌山県紀伊大島、12 月に高知県甲浦で試験操業を始めた（東洋漁業株式会社東京支店第 2 期事業報告 明治 39 年 8 月-明治 40 年 7 月）。同地では、同業者を含めて漁獲が多いために価格が暴落した。臓物は製品化せずに近世捕鯨以来の出入り商人に売却した。また、同事業場は地元村民からの反対運動を受け、土地も狭いため隣接する徳島県穴喰に移転することが進められ（同前）、1907/08 年の操業年度の事業場は蔚山、[土佐] 清水、穴喰、大島、銚子、鮎川の 6 か所と、四国太平洋側の事業場が甲浦から穴喰に移動し、土佐清水が加わっている（東洋漁業株式会社第 2 期報告書 自明治 40 年 8 月 1 日 至明治 41 年 7 月 31 日 [第 4 期の間違いか]）。

1910 年の東洋捕鯨の設立当時、同社が所持した事業場は、明石編（1910）付録の地図に示されている 21 事業場から許可申請のみの台湾を除いた 20 か所であった。この地図に示されていない根拠地には、同年中に閉鎖された事業場だけが合った場所、東洋捕鯨の設立に加わらなかった捕鯨会社だけが用いた事業場が考えられる。それらについては、様似町史編さん委員会編（1992: 777）、串本町（1924: 368-369）、伊豆川（1943: 645-646）、日野（1978）などから、内外水産の北海道様似、大東捕鯨の岩手県両石、内外水産の同県桑浜、紀伊水産の和歌山県串本、大東捕鯨の高知県浮津、長門捕鯨の山口県仙崎、長崎県対馬にあった泉、そして東洋捕鯨に参加した大日本捕鯨が短期間操業した佐賀県呼子と長崎県対馬の西泊を加えた 9 か所が見つかった。これらをすべて合わせると、1910 年現在の捕鯨根拠地は北から順に、北海道の様似、青森県の鮫、岩手県の両石と桑浜、宮城県の鮎川と荻浜 [明石 1910 の地図では荻ノ浜]、千葉県の銚子、三重県の二木島、和歌山県太地と [紀伊] 大島および串本、山口県の仙崎、徳島県の穴喰、高知県の甲ノ浦 [地図では甲浦] と浮津および [土佐] 清水、佐賀県呼子、宮崎県の細島、鹿児島県の甕島、長崎県の五島 [地図では黄島] と有川そして対馬にあった比田勝と泉ならびに西泊、石川県の能登 [所在地は能登町宇出津および小木]、朝鮮の蔚山と長箭および新甫 [所在地は馬養島] ならびに巨濟島の 29 個所となる（表 1、図 1）。佐賀県の小川島の事業場に

については、加部島への移転が1910年1月のため(安永 2011)、この図表からは省いた。

図表1の、様似と巨済島は一度でも操業した根拠地を集成した笠原(1950)の図6にも記載がないが、様似は様似町史編さん委員会編(1992)に地元の旧家が1910年に内外水産の捕鯨船をチャーターした操業で1月半に大鯨27頭に捕獲したと記され、1915年にも操業して鯨製品を製造した記録があり(釧路市総務部地域史料室 2006: 100-101)、東洋捕鯨単冠事業場長必携の沿革には、同事業場の設備の一部は内外水産の様似事業場から移設したと記されている(宇仁 2015: 22)。巨済島は日韓捕鯨の根拠地であり(片岡・亀田 2012)、大黒山島事業場長必携にも同島知世浦に事業場があったことが記されている。『韓半島沿海捕鯨史(増補版)』(朴 1995: 265)には、東洋捕鯨が大韓帝国農商工部に提出した書類に記載した事業場の位置図が掲載され、東洋捕鯨1-9回営業報告に所有する事業場として巨済島の名が記されているので、1910年当時に存在した事業場に区分けした。

事業の分布を見ると、日本の近代捕鯨は、朝鮮半島沿岸で開始され、1910年の時点で設置されていた事業場は、紀州や土佐、西海など網取り捕鯨の漁場、そしてロシア企業が漁場とした朝鮮半島東側の日本海沿岸に多かった。それ以外の事業場は、定置網捕鯨が行われた能登(勝山 2016)、アメリカ

表1. 1910年に存在した捕鯨事業場

地域	事業場名	所在地(現在の自治体名)	設置者: 東洋捕鯨設立参加会社	設置者: 第二次合併参加会社	設置者: 大洋漁業系
北海道	様似	北海道様似郡様似町		内外水産*2	
本州	鯨	青森県八戸市	大日本捕鯨		
	桑浜	岩手県釜石市		内外水産*3	
	両石	岩手県釜石市			大東捕鯨*5
	鮎川	宮城県石巻市	東洋漁業	紀伊水産、長門捕鯨、大日本水産	土佐捕鯨*6
	荻浜	宮城県石巻市	帝国水産	内外水産	藤村捕鯨*6
	銚子	千葉県銚子市	東洋漁業、大日本捕鯨、東京岩谷商会		大東捕鯨*5
	能登	石川県鳳珠郡能登町	東洋捕鯨*1		
	二木島	三重県熊野市二木島町	大日本捕鯨		
	太地	和歌山県東牟婁郡太地町	帝国水産		大東捕鯨*5
	大島	和歌山県東牟婁郡串本町	東洋漁業、長門捕鯨	大日本水産	
	串本	和歌山県東牟婁郡串本町	太平洋漁業*3	紀伊水産*4、内外水産、大日本水産*4	
	仙崎	山口県長門市仙崎		長門捕鯨	
四国	穴喰	徳島県海部郡海陽町	東洋漁業		
	甲浦	高知県安芸郡東洋町	東洋漁業、長崎捕鯨、大日本捕鯨		
	浮津	高知県室戸市		内外水産	大東漁業、土佐捕鯨、丸三製材
	清水	高知県土佐清水町	東洋漁業、長崎捕鯨、帝国水産	内外水産	
九州	呼子	佐賀県東松浦郡呼子町	大日本捕鯨	大日本水産・小川島捕鯨	大東捕鯨*5
	比田勝	長崎県対馬市上対馬町	長崎捕鯨		
	西泊	長崎県対馬市上対馬町	大日本捕鯨*7	長門捕鯨*7	
	泉	長崎県対馬市上対馬町		内外水産*7	
	有川	長崎県南松浦郡新上五島町	東洋漁業		
	黄島	長崎県南松浦郡新上五島町	長崎捕鯨		
	細島	宮城県日向市	大日本捕鯨		
	甕島	鹿児島県薩摩川内市	東洋捕鯨*1		
朝鮮	新甫	北朝鮮咸鏡南道新甫市	東洋捕鯨*1		
	長箭	北朝鮮江原道高城郡長箭邑	東洋漁業、長崎捕鯨		
	蔚山	大韓民国蔚山広域市南区	東洋漁業、長崎捕鯨、日韓捕鯨		
	巨済島	大韓民国慶尚南道巨済市	東洋捕鯨*1		

設置者の出典: 無印は明石編 1910: 241-268、*1 明石編 1910の地図、*2 様似町史編さん委員会 1992: 777、*3 東洋捕鯨釜石事業場長必携、*4 串本町 1924: 368-369, 374-375、*5 伊豆川 1943: 645-646および表、*6 牡鹿町町誌編纂委員会 2005: 218-225、*7 日野 1978



図 1. 1910 年に存在した沿岸捕鯨の根拠地。明石編 1910 に加筆（ゴシック体の部分）

の捕鯨船が 1820 年代に Japan Ground [ジャパン・グラウンド] として報告し（森田 1994: 84）、この情報をもとに関沢明清らにより捕鯨調査が行われていた海域である本州北東部の太平洋側に点在していた。日本に近代捕鯨事業が定着した 1910 年の段階では、捕鯨の漁場は、近世捕鯨やロシア捕鯨、アメリカ捕鯨による既知の漁場が中心であったことが明らかである。その後の東洋捕鯨の営業報告を見ると、1912（明治 45）年までに新たに事業場の許可を得た場所は、室蘭（北海道）、戸賀（秋田県）、佐渡（新潟県）、下田（静岡県）、三国（福井県）、美保および隠岐（島根県）などが含まれ、日本海と太平洋の両方に広がっており、試験的とも思われる場所にまで根拠地を置いた。東洋捕鯨の営業報告を見ると、明治末までに置かれた事業場のうち、本州の日本海側や静岡県のものは成績が悪く、短命に終わっている。

なお、表中の第二次合併は、東洋捕鯨が 1916（大正 5）年に内外水産、紀伊水産、大日本捕鯨、長門捕鯨を吸収合併したものを指している。

太平洋戦争 1941-1945 の期間中に存在した根拠地

次に太平洋戦争の期間中の沿岸捕鯨の根拠地を見てみたい。太平洋戦争の後半になると潜水艦や機雷を避けるため操業停止となった事業場、逆に代替として新たな根拠地の設置があったこと、1911 年に締結された鯨類保護条約により民間人の立ち入りが禁じられていた中部千島沿岸が 1942 年になって農林省の監督下で民間事業者にも操業させるなど（日本海洋漁業協議会 1951: 219-221）、1941 年以前とは異なる条件により事業場の移転や新設がおこなわれた。太平洋戦争の期間中をとおして見た方が、戦前期の根拠地の最終的な分布を表すと考える。

戦時体制下、国内資源の総動員という視点から捕鯨の調査がなされ「捕鯨資料 第八輯ノ（一）日

表 2. 太平洋戦争中 (1941-1945 年) に存在した沿岸捕鯨の根拠地一覧

地域	根拠地名	所在地 (当時の住所)	日本水産	大洋漁業	遠洋捕鯨	鮎川捕鯨	備考
千島	北千島	北海道幌筵島樺鉢	◎				
	乙前	北海道幌筵島乙前		◎			
	梅浦	北海道新知島梅浦	*	*			
	薬取	〃 薬取郡薬取村幌琴				○	択捉島
	紗那	〃 紗那郡紗那村内岡	○				択捉島
		〃 紗那郡紗那村有萌		●	○		択捉島
	单冠	〃 択捉郡留別村年萌	○				択捉島
	斜古丹	〃 北色丹郡色丹村シャコタン	○				色丹島
	網走	〃 網走郡網走町	○	●			
	霧多布	〃 厚岸郡浜中村	○				
	厚岸	〃 厚岸郡厚岸町		●	○		
	釜石	岩手県上閉伊郡釜石町	○	●	○	◎	
	鮎川	宮城県牡鹿郡鮎川村	○	○	○	○	
	小笠原	東京府小笠原島兄島滝ノ浦	○		日本捕鯨業水産組合 (1940) の事業場名は父島		
		〃 母島北村		●	○		
内地	太地	和歌山県東牟婁郡太地町		○			
	[紀伊] 大島	〃 大島村	○		○	○	
	呼子	佐賀県東松浦郡呼子町	●	◎			
	大河内	長崎県上県郡豊崎村	○				対馬島
	壱岐	〃 壱岐郡田河村	○				
	有川	〃 南松浦郡有川村	○				中通島
	外ノ浦	宮崎県南那珂郡南郷村	○				
	久根津	鹿児島県大島郡東方村	○				奄美大島
	樺太	樺太大泊郡知床村札塔	○		日本捕鯨業水産組合 (1940) の事業場名は札塔		
	長箭	朝鮮江原道高城郡長箭里	○				
	九龍浦	〃 慶尚北道迎日郡九龍浦邑柄浦里	*				
	蔚山	〃 慶尚南道蔚山郡長生浦	○				
	济州島	〃 全羅南道济州郡济州島西帰浦	○				
外地	大黒山島	〃 〃 務安郡大黒山島曳里	○				
	大青島	〃 黄海道長淵郡白翎面大青島里	○				
	於青島	〃 全羅南道沢溝郡米面於青島里		*			
	関東州	関東州海洋島会湾西一八〇	◎				海洋島、租借地
	青島	中华民国山东省青島市荷沢路		*			戦時特別措置の許可
	台湾	台湾高雄州恒春郡恒春庄鶯鑾鼻	○		日本捕鯨業水産組合 (1940) の事業場名は大板埭		

出典：●日本捕鯨業水産組合 1940、○同 1940、1943、◎同 1943、*日本海洋漁業協議会 1951。根拠地名と所在地は日本海洋漁業協議会 (1951) を基礎に不足部分を村田校閲 1929 からおぎなつた。加熊別は操業記録がなく、室蘭は () 入りのため設備のみ保有と判断して掲載せず。千島は北海道根室支庁管内だが戦後は領有放棄した地域のため区別した。台湾事業場長必携に記載の海浜地借用願は、阿緞庁至厚里鶯鑾庄土名大板埭、操業海域の中心は阿緞庁下恒春支庁大板埭

整理すると、太平洋戦争の期間中に操業した根拠地は、千島 7 か所、内地 14 か所、外地 11 か所となる。戦後に失った根拠地は 32 か所中 18 か所と半数を超えており、網取り捕鯨時代からの漁場が不振となるなか、遠方に新たな漁場を求めて拡大した沿岸捕鯨であったが、戦争よって新漁場の多くを失ったことが明らかである。なかでも、朝鮮の蔚山と千島の色丹島と択捉島は捕獲数も多かった (宇仁 2016b)。なお、表の地域区分であるが、千島は北海道根室支庁管内にあり法令上は内地であるが、

戦後に失われた地域であるので区別した。樺太が内地に編入されるのは、1943年と遅く日本領時代の大半が外地として扱われてきたので、そのように区分した。

1899-1945年に一度でも操業した沿岸捕鯨の根拠地

戦前の捕鯨根拠地の一覧として笠原(1950)の図6が著名である。これは、1911-1945年の捕獲を集成し、16に分けた海区ごとに捕獲の傾向を考察した報告である。戦前の日本の沿岸捕鯨を集成として高く評価され、生物系や水産系の研究では必ずといってよいほど引用されてきた。報告の図6では、一度でも操業した根拠地80箇所を図示しているが、操業が記録されているのにも関わらず記載されていない根拠地がある。それは前述した様似や巨済島のほか、場長必携からは幌筵島の北千島、東洋捕鯨の営業報告からは徳島県穴喰[現・海陽町]が得られ、大日本水産が短期間操業した樺太の内音[ないおん](日本捕鯨業水産組合1912)が見えず、計5箇所が抜けていた。青島については、名前は示されているが、地点が地図上に示されていない。Terry(1950)も戦前を網羅したとする図を掲載し、笠原より多い82事業場を示しているが、巨済島と樺太札塔の位置が誤っており、内音と様似そして和歌山県勝浦と佐賀県小川島の計4か所が欠けている。そこでTerry(1950:23)のFig.1を改訂し、戦前の沿岸捕鯨の根拠地86か所について、漢字表記による一覧、そして集成図を作成した(表3、図3)。なお、朝鮮東岸の丑山浦[ちゅうざんぼ]については、本論の調査では日本企業による操業記録は得られなかった。また、千島の根拠地名の読みは、写真集懐かしの千島編纂委員会(1981)を参考にした。

表3. 1900-1945年に一度でも操業した沿岸捕鯨根拠地

海区 番号	根拠地名	海区 番号	根拠地名	海区 番号	根拠地名	海区 番号	根拠地名
1	1 加熊別*1	5	21 鮫	7	41 浮津	11	62 美保関
1	2 乙前/北千島	5	22 桑浜	7	42 土佐清水	10	63 境
1	3 梅浦	5	23 両石	7	43 佐賀関	10	64 舞鶴
3	4 札塔 [樺太]*2	5	24 釜石	7	44 細島	10	65 敦賀
1	5 薬取	5	25 牧浜	7	45 外浦	10	66 宇出津
1	6 有萌	5	26 女川	8	46 手打	12	67 楡津
1	7 紗那*3	5	27 茨浜	8	47 甕島	12	68 新甫
2	8 单冠*4	5	28 大原	8	48 大浜	12	69 長箭
2	9 内保	5	29 鮎川	8	49 黄島	13	70 丑山浦*1
3	10 宗谷	5	30 女川	8	50 樺島	13	71 九龍浦
3	11 紋別	6	31 銚子	11	51 有川	13	72 蔚山(長生浦)
3	12 網走	6	32 館山	11	52 宇久島	13	73 巨済島*6
2	13 斜古丹	6	33 下田	11	53 济州島(西帰浦)	14	74 大黒山島
4	14 根室	6	34 二木島	11	54 呼子	14	75 於青島
4	15 花咲	6	35 太地	11	55 片島(加部島)*5	14	76 大青島
4	16 霧多布	6	36 串本	11	56 壱岐	14	77 海洋島[関東州]*2
4	17 厚岸	6	37 紀伊大島	11	57 比田勝	14	78 青島
4	18 釧路	7	38 穴喰	11	58 西泊	9	79 久根津
4	19 広尾	7	39 甲浦	11	59 泉	16	80 大板埸[台湾]*2
4	20 室蘭	7	40 室戸	11	60 大河内	15	81 小笠原*7
				11	61 仙崎	10	82 隠岐
6	83 勝浦*8	4	84 様似*9	3	85 内音[ないおん]*10	86	小川島*11

*1 操業記録は得られず、*2 [] は場長必携の事業場名(宇仁2016)、*3 字名から東洋捕鯨は内岡[なよか]と呼んだ、*4 年萌[としもえ]とも呼んだ、*5 佐賀県立名護屋城博物館編2006、*6 東洋捕鯨営業報告に操業記録、*7 父島(後に兄島に移転)と母島(徳山1992:40-41)、*8 笠原1950、*9 様似町史編さん委員会1992、*10 無署名1912
*11 安永2011。海区は笠原1950、番号はTerry1950による。()は筆者による注記。83-86は現図に記載がない事業場

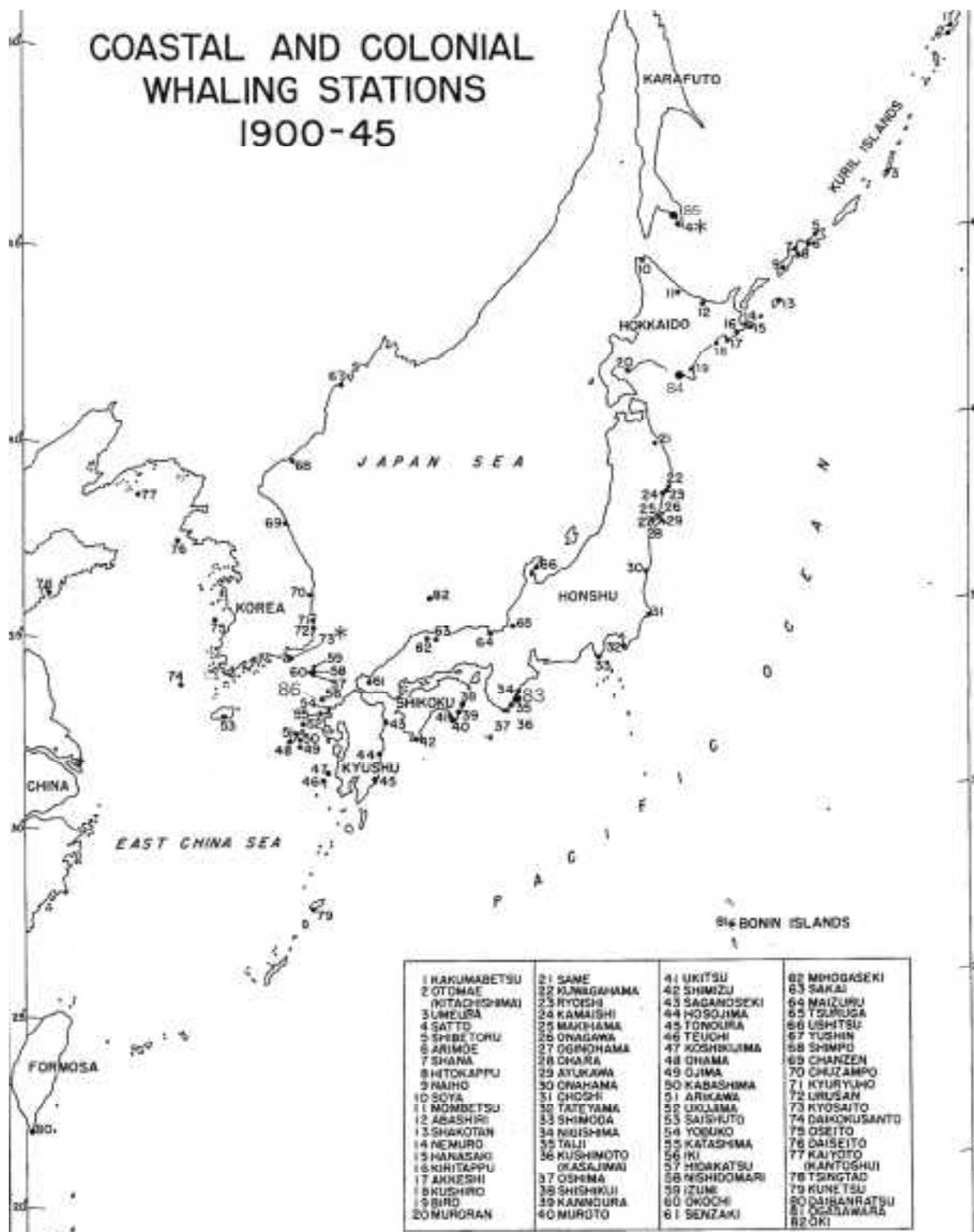


図 3. 1900-1945 年の沿岸捕鯨根拠地。*は場所を訂正、83-86 は新たに追加したもの。Terry 1950 に加筆

ボックス式と斜路式

次に日本の近代捕鯨で用いられた解剖の方式を確認しておきたい。東洋捕鯨設立当時の解剖設備は、解剖船、ボックス式（吊下げ式）、引揚棧橋（斜路式）の3つの異なる方式があったが、その後30年をかけ、斜路式が事業場全体に行き渡るようになった（宇仁 2016b）。アンドリュースは日本での解剖方式について、ノルウェーから学んだ斜路式もあるが、より普及しているのはボックス式で日本が独自

に採用あるいは普通ではない解剖方式と記し (Andrews 1911: 418, 1916: 79)、その効率的な作業を描写している (Andrews 1916: 79-84)。ボックス式が遅れた旧式の解剖方式とは見ていない。アンドリュースが、1910 (明治 43) 年の紀伊大島 (図 4. 左) や 1912 年の蔚山 (図 4. 右) でボックス解剖を何枚も撮影しているのは、効率のよいすぐれた方式と見なしてのことかも知れない。東洋捕鯨鮎川事業場では、ボックスと斜路を併用した同時進行の解剖がおこなわれており、それについても写真で記録している (図 5. 右)。斜路式の解剖は、ノルウェーやカナダのニューファンドランドでは 19 世紀末から用いられていたことが写真でも確かめられる (Johnsen 1959 : 347-356, Dickinson and Sanger 2005: 29-39)。日本でも、網取り捕鯨では礫浜に陸揚げすることが普通であり、これも自然地形を生かした斜路式の解剖といえる。近代捕鯨になるとアンドリュースの写真から東洋捕鯨鮎川事業場や紀伊水産申本事業場では少なくとも 1910 年には斜路式が使われていることがわかる (図 5)。東洋漁業鮎川事業場は日本で初めて斜路式を採用したとされるが (加藤・宇仁 2017: 82)、評価すべきは、むしろ斜路式とボックス式の併用による効率的な解剖作業法かも知れない。近世捕鯨では自然地形の海浜の傾斜を斜路として用いており、ボックスは捕鯨後発国の日本で工夫された解剖設備と想像される。

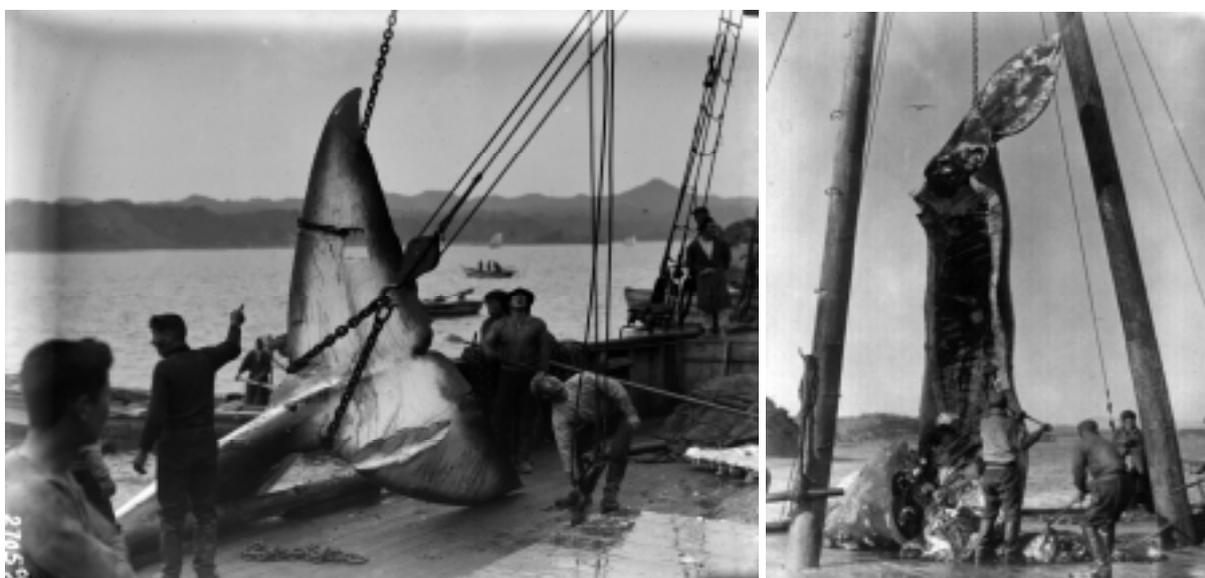


図 4. ボックス式の解剖風景 (左: 東洋捕鯨 [紀伊] 大島事業場 1910 年、右: 同社蔚山事業場 1912 年) Image #27059, 218405 American Museum of Natural History Library



図 5. 斜路式 (引揚棧橋) の解剖風景 (左: 紀伊水産申本事業場、右: 東洋捕鯨鮎川事業場)。鮎川ではボックス式が併用された Image #27053, 27142 American Museum of Natural History Library

なお、ボック式の起源や名前の由来は不明だが、「ボック船」という言い方が現在も散見され、クレーンの意味で使われている（青空エクスプレス「国の避難港整備事業の遅延に、室戸市民が早期完工を陳情」 <https://blog.goo.ne.jp/aozora110/e/f00e064dba40c38ecc553e8f8bf01cbe> 2018.10.28 閲覧）。ここからもボックは、吊下げ装置、あるいはクレーンと理解できる。海外でも類似の解剖設備が存在し、1874年に出版された単行本にカリフォルニアのカーメル Carmel 湾の陸上基地を描いた図に同様の吊下げ式クレーンが見える（Scammon 1874: Plate XXVII、図）。吊下げ式の解剖を近代捕鯨で、それも多くの鯨を効率よく処理したのは日本だけであるが、この方式を日本独自の方式と呼ぶことはできないと考える。

戦前の沿岸捕鯨船

最後に日本の近代の沿岸捕鯨で用いられた捕鯨船を一望しておきたい。1899–1945年に日本企業で操業した沿岸捕鯨船について、明石編（1910）や日本捕鯨業水産組合（1940, 1943）に現れる捕鯨船名を収集し、船体の特徴や来歴を『日本船名録』を用いて調べた。結果、傭船を含め48隻が収集できた（表4）。このうちメイン号とレギナ号は、『日本船名録』には一度も登場しないことから、日本船籍になることがなく、ずっと傭船のまま日本企業の捕鯨事業に参加していたと推測される。メイン号は長崎捕鯨合資会社が著名なノルウェー人砲手メルソム H. G. Melsom を砲手として傭船し（宇仁 2017）、東洋捕鯨にまで引き継がれた（明石編 1910: 22、宇仁 2016b）。レギナ号は日本遠洋漁業や東洋漁業が傭船したが1905（明治38）年に蔚山沖で沈没した（明石編 1910: 224–228, 236, 241）。

一覧にすると沿岸捕鯨船は船体サイズから大きく2つく分けできることがわかる。1910年建造の第二神功丸まではそのほとんどが総トン数110–130トン、全長28–30mであり、例外は1907年に日本で建造された第三東郷丸の152トン33mの1例であった。同船は、当時土佐紀州方面の捕獲はシロナガスクジラが多く従来の捕鯨船では能力不足であったため大型にしたものである（渋谷 1967: 24）。これを除くと、ノルウェー製は110t前後、国内製造のものは130t程度で一定している。その後、1912（大正元）年の極洋捕鯨の鯨洋丸から200トン級の大型となり、その後の新造船は196–222トン32–34mであった。本論では、1910年まで建造された36隻を「初期型」とし、1912年以降に建造された捕鯨船を「後期型」と呼ぶ。傭船の3隻も来歴と年代から初期型である。『日本船名録』の記載では、初期型の捕鯨船の多くは帆を備えた動力船で、帆船の形式であるスクーターやスプール、カッターとして登録されていたこともわかる。初期型のうち木造船の浦島丸は78トン、鋼船の第五東郷丸は82トンととくに小形であった。

建造地は、初期型36隻のうち国産は8隻であり、残り28隻はノルウェー製であった（表3–8）。国内で建造された沿岸捕鯨船は1907年に4隻と集中し、1909年と1910年に1隻ずつ、その後は1925年と1926年に再び1隻ずつであった。沿岸捕鯨船は、終戦に至るまで数からすればノルウェー製が圧倒していた。さらに、終戦後も大破や沈没を免れた初期型の捕鯨船が少数ながら操業を続けたものもある。山下（2004: 175）は「日本での捕鯨船の建造は1907年から本格化し」と記すが、国産の捕鯨船が数多く建造されたのは、その後の南極海捕鯨に向けた大型の捕鯨船に関したことであった。

中古船として日本企業に売却された捕鯨船のなかには、ノルウェー本国から直接来たのではなく、カナダ北東部のニューファンドランド州の沿岸捕鯨に従事していた船が回航してきた例もある。Humber、Neptun、Falcon（Vikingから改名）、Avalon、Baccalieu、Finの6隻である（Dickinson and Sanger 2005: 157–158）。『日本船名録』のカタカナ名称から元船名は同定可能で、日本での名称は、第二東

表 4. 1899-1945 年に操業した沿岸捕鯨船

登録船名	製造年	製造地	総トン	寸法*1 L×W×D	帆船形式	船体番号	所有者*2	元船名および備考
1 初鷹丸	1897.2	長崎	105t	26.2×4.8×3.1	スクナー	1659	長崎捕鯨	新造
2 烽火丸	1899.3	大阪	124t	27.9×4.7×3.7	スクナー	1867	橋本久平	新造
3 第一長周丸	1899.11	東京	122t	29.0×5.1×3.0	スクナー	5644	日本遠洋漁業	新造
4 オルガ丸	1898	ノルウェー	125t	28.4×5.5×3.5	スクナー	9045	東洋漁業	Olga*3
5 にこらい丸	不明	ノルウェー	132t	28.5×5.5×3.5	カッター	9329	東洋漁業	Николай [Nicolaï]*3
6 アイランド丸	1903	ノルウェー	110t	28.7×5.1×3.1	スループ	10315	内外水産	Island*4
7 ギョルギー丸	不明	ノルウェー	137t	28.6×5.5×4.1	スクナー	10328	内外水産	ГЕОРГИИ*5 [Georgij]*3
8 第二東郷丸	1902	ノルウェー	115t	28.4×5.2×3.2	スループ	10360	長崎捕鯨	Humber*6
9 第二大東丸	1905	ノルウェー	117t	28.9×5.2×3.1	スループ	10367	大東漁業	Baccaleau*6
10 六甲丸	1907.10	大阪	135t	30.4×5.3×3.2	スループ	10376	帝国水産	新造、後に第六捕鯨丸に改名*7
11 第三東郷丸	1907.1	大阪	152t	33.1×5.3×3.6	スクナー	10377	長崎捕鯨	新造
12 曙丸	1906.2	ノルウェー	113t	28.6×5.2×3.1	カッター	10416	東洋漁業	Queen Alexandra*3
13 いなづま丸	1906.10	ノルウェー	116t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10419	東洋漁業	新造
14 いかつち丸	1906.10	ノルウェー	116t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10425	東洋漁業	新造
15 神功丸	1906.5	ノルウェー	112t	28.6×5.1×3.1	スクナー	10471	長門捕鯨	新造、レギナ号の代船*8
16 レックス丸	1902.5	ノルウェー	119t	28.6×5.2×3.2	スループ	10523	東洋漁業	Rex*3
17 第一太平丸	1904	ノルウェー	111t	28.2×5.1×3.2	スループ	10812	太平洋漁業	Neptune*6
18 第二太平丸	1902.1	ノルウェー	122t	28.4×5.2×3.3	-	10820	太平洋漁業	Falcon*6
19 第一東郷丸	1906.1	ノルウェー	112t	28.6×5.2×3.1	スクナー	10841	長崎捕鯨	新造
20 福志満丸	不明	ノルウェー	111t	28.4×5.1×3.2	スループ	10843	土佐捕鯨	Roskva*4
21 丸三丸	1907.8	ノルウェー	116t	28.5×5.3×3.0	-	10850	丸三製材	新造
22 浦島丸	1909.1	長崎	78t	23.2×4.3×2.5	2木	10882	長門捕鯨	新造
23 アヴァロン丸	1904	ノルウェー	108t	28.4×5.0×3.0	カッター	10895	帝国水産	Avalon*6
24 第一捕鯨丸	1903	ノルウェー	103t	27.1×5.1×3.2	スループ	10897	大日本捕鯨	Kap Nor*4
25 漣丸	1906	ノルウェー	120t	28.8×5.2×3.3	-	10914	紀伊水産	Hjorleifur*4
26 第三捕鯨丸	1902	ノルウェー	109t	28.6×5.2×3.2	スループ	10915	大日本捕鯨	Selvik*4
27 第五捕鯨丸	1898	ノルウェー	103t	26.9×5.0×3.2	スループ	10916	大日本捕鯨	Nordebble*4
28 諏訪丸	1898	ノルウェー	114t	28.6×5.2×3.2	スループ	10917	帝国水産	新造
29 第二捕鯨丸	1907.7	大阪	132t	30.2×5.2×3.3	スループ	11050	大日本捕鯨	新造
30 天富丸	1907.5	ノルウェー	123t	28.5×5.3×3.0	スクナー	11059	東海漁業	新造
31 第一大東丸	1907.6	ノルウェー	120t	29.5×5.3×3.1	スクナー	11093	大東漁業	新造
32 第五東郷丸	1890*4	ノルウェー	82t	25.5×5.0×2.8	-	12133	東洋捕鯨	Snorri Sturlason*4
33 千鳥丸	1903	ノルウェー	110t	28.4×5.1×3.2	スループ	12167	紀伊水産	Thor*4
34 第一博運丸	1906	ノルウェー	112t	28.7×5.2×3.1	-	12438	大日本水産	Faula*4
35 第二博運丸	1906	ノルウェー	112t	28.7×5.2×3.1	-	12439	大日本水産	Busta*4
36 第二神功丸	1910.6	大阪	130t	30.2×5.2×3.2	-	13372	長門捕鯨	新造 【以上、初期型】
37 鯨洋丸	1912.5	イギリス	195t	32.1×6.4×3.9	-	29082	遠洋捕鯨	元船名不明 【以下、後期型】
38 鮎川丸	1925.9	大阪	181t	30.9×6.2×3.9	-	31165	鮎川捕鯨	新造
39 第一元日丸	1926.4	大阪	216t	37.1×6.5×3.9	-	33571	日本海洋漁業	元船名不明
40 昭和丸	1928.5	ノルウェー	187t	31.8×6.4×3.9	-	33852	東洋捕鯨	新造
41 第二昭和丸	1930.1	ノルウェー	196t	32.0×6.6×3.9	-	36156	東洋捕鯨	新造
42 第五昭和丸	1924	イギリス	219t	33.8×7.1×4.1	-	39661	日本捕鯨	元船名不明
43 第三昭和丸	1926	ノルウェー	222t	43.0×7.1×4.1	-	39662	日本捕鯨	元船名不明
44 第六昭和丸	1925	ノルウェー	217t	33.8×6.7×4.2	-	39663	日本捕鯨	元船名不明
45 澤捉丸	1912	イギリス	207t	32.4×6.5×4.1	-	39664	日本捕鯨	元船名不明
46 色丹丸	1912	イギリス	207t	32.4×6.5×4.1	-	39665	日本捕鯨	元船名不明
47 メイン号 Main*4		ノルウェー						新造、長崎捕鯨や東洋捕鯨で備船として操業した*8
48 レギナ号 Regina*3		ノルウェー						新造、日本遠洋漁業や東洋漁業で備船として操業、1905.12月沈没*8
フィン号 Fin*6		ノルウェー						Tønnessen 1967 では Finn、日本遠洋漁業にて備船契約するも紅海で座礁沈没*9

記載は船体番号順。*1 尺はメートルに変換した。*2 所有者は初出のもの。元船名は「日本船名録」ではカタカナ表記のため、綴りは次の文献から得た：*3 Tønnessen 1967、*4 船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム n.d.、*5 宇仁 2017b、*6 Dickinson and Sanger 2005。

*7竹内賢士氏私信 2018.3.11、*8 明石編 1910、*9 渋谷 1967による

郷丸 Humber、第一太平丸 Neptun、第二太平丸 Falcon (Viking から改名)、アヴァロン丸 Avalon、第二大東丸 Baccalie である。Fin 号は、Avalon とともに帝国水産が購入したが回航中の紅海で座礁難破し (明石編 1910: 254-255、渋谷 1967: 128)、日本には到達しなかった。ニューファンドランドでは1904年をピークに捕鯨が衰退し始めたが、それはちょうど日本の捕鯨が発展を見せた時期と一致し、多くの利益を得た日本の捕鯨会社が捕鯨船を購入することにつながった。さらに、ニューファンドランドからノルウェー人砲手が日本に渡り、なかには同州出身の妻を連れたものも含まれていた (サンガー・ディッキンソン 2010)。



図 6. 鮎川に碇泊する内外水産のノルウェー製捕鯨船アイランド丸 (中央の煙突)。アンドリュースの写真で内外水産のファンネルマークが明らかとなった。同社の捕鯨船は2隻であることから、左奥のおなじマークの船がギョルギー丸である。右の煙突は東洋捕鯨 Image #27369 American Museum of Natural History Library

社章ファンネルマークと船体図

捕鯨会社の社章あるいは船舶の煙突に見える印ファンネルマークは、会社の識別に役立ち、既知のマークであれば撮影年代の特定が可能な場合がある。これまで捕鯨船のファンネルマークは収録された断片的に記載されるだけであった。日本遠洋漁業と東洋捕鯨については明石編 (1910) 収録の写真、大正末期に存在した東洋捕鯨、大東漁業、土佐捕鯨、藤村捕鯨、遠洋捕鯨、そして鮎川捕鯨については大友亮氏の資料から近藤 (2001: 301) が、これと一部重複するが土佐捕鯨、丸三製材、大東漁業など、大洋漁業系列の捕鯨会社は徳山 (1992: 7-9) がまとめている。このほか、日野 (1978) が長門捕鯨と東洋漁業を、宇仁 (2017) が写真から長崎捕鯨のものが示している。そしてアンドリュースが鮎川で撮影した写真から内外水産のものが明らかになっている (加藤・宇仁 2017: 89、図 6)。手前に写るのは、ノルウェー製の初期型捕鯨船アイランド丸である。

ノルウェー製の初期型捕鯨船の船体図は、ノルウェー海洋博物館 Norsk Maritimt Museum には少なくとも第二東郷丸、諏訪丸、レックス丸、レギナ丸、曙丸の5隻分が所蔵されている (Torstein Sjøvold 氏

私信 2016年11月17日)。このうちおなじスループ型の帆を持つレツクス丸のものを掲げておく(図7)。船体図からは、当時の捕鯨船は捕鯨砲を備える船首部分の高さが現在の捕鯨船に比べて低かったことがわかる。見張台は描かれていない。船室については、上級船員用は船尾、下級乗組員は船首に配備されている。本論の掲載図では文字が判読不能だが、元図を見ると船長室は船尾右舷の前側にあり引出付きのベッドが備えられ、左舷側向かいがサロンになっている。サロンの後側にも広い1人部屋がある。船首側は、乗組員の居室で2人部屋が5室、右舷後側の1室は1人部屋となっている。

日本の近代沿岸捕鯨は、このような捕鯨船で始まり、戦後間もない時期に至るまで初期型の捕鯨船が用いられたのである。

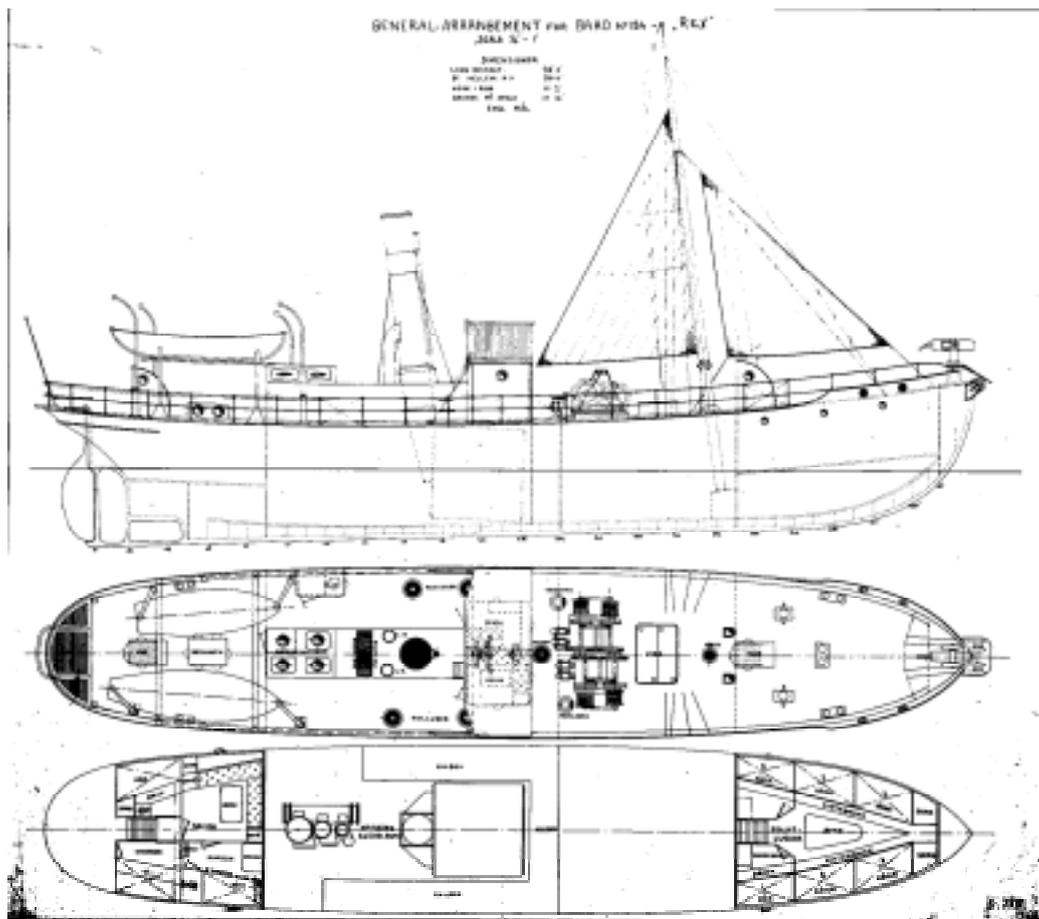


図7. レツクス丸の船体図 (ノルウェー海洋博物館 Norsk Maritimt Museum 蔵)

謝辞

本論をまとめるにあたり、次の機関や個人の方々にお世話になりました。記してお礼申し上げます。日本水産株式会社、横浜みなと博物館、大阪府立中之島図書館、ケンシヨク「食」資料室、山口県図書館、アメリカ自然史博物館研究図書館、Torstein Sjøvold 氏、長澤文雄氏、竹内賢士氏。

引用文献

明石喜一編 1910 本邦の諾威式捕鯨誌. 東洋捕鯨, 大阪。(復刻版「明治期日本捕鯨誌」マツノ書店 1989. 徳山)
Andrews, R. C. 1911. Shore Whaling: A World Industry. The National Geographic Magazine, 2 (25): 411-442.
Andrews, R. C. 1916. Whale Hunting with Gun and Camera. D. Appleton, New York, 322pp.
Dickinson, A. B. and Sanger, C.W. 2005. Twentieth-century Shore-station Whaling in Newfoundland and Labrador.

- McGill-Queen's University Press, Montreal. 254pp.
- 日野義彦 1978 対馬における近代捕鯨について. 西南地域史研究, 2: 380-394.
- 伊豆川浅吉 1943 土佐捕鯨史 上・下. 日本常民文化研究所彙報, 53, 54. (三一書房. 1973. 日本常民生活資料叢書 23 に再録)
- Johnsen, A. O. 1959. Finnmarksfangstens Historie 1864–1905: Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 1. 710pp., Norges Hvalfangstforbund, Sandefjord.
- 笠原昊 1950 日本近海の捕鯨業とその資源. 日本水産株式会社研究所報告 4, 日本水産株式会社研究所, 東京. 103pp.
- 加藤幸治・宇仁義和・成澤正博 2017 写真引き 100 年前の鮎川のすがた. 東北学院大学論集歴史と文化, 55: 69–94.
- 勝山敏一 2016 北陸海に鯨が来た頃. 桂書房, 富山. 237pp.
- 串本町編 1924 和歌山県串本町誌. 串本町, 串本. 848pp.
- 釧路市総務部地域史料室 2006 釧路捕鯨史. 釧路市役所, 釧路. 379pp.
- 村田福次郎校閲 1929 最近検定市町村名鑑 昭和 4 年版. 福神出版部, 東京. 604pp.
- 無署名 1912 日本捕鯨業水産組合報. 大日本水産会報, 359: 79, 361: 72, 363: 75..
- 日本捕鯨業水産組合 1912 捕鯨便覧第一編.
- 日本捕鯨業水産組合 1940 捕鯨資料 第八輯ノ(一) 日本沿岸捕鯨業.
- 日本捕鯨業水産組合 1943 捕鯨便覧第一編.
- 日本海洋漁業協議会 1951 一九四〇年の漁業実績—特別委員会報告書一. 日本海洋漁業協議会, 東京. 234pp.
- 日本水産 1981 日本水産の 70 年. 日本水産, 東京. 464pp.
- 牡鹿町誌編纂委員会編 2005 牡鹿町誌中巻. 牡鹿町, 牡鹿. 1277pp.
- 朴九秉 1995 韓半島沿海捕鯨史 (増補版). 民族文化, 釜山. 593pp.
- 様似町史編さん委員会 1992 改訂様似町史. 様似町, 様似. 874pp.
- サンガー. C・ディキンソン. A. 2010 ニューファンドランドと 20 世紀日本沿岸捕鯨の関わり. 太地町立くじらの博物館編. 最後の刃, pp52–60. 太地町立くじらの博物館, 太地. 61pp.
- Scammon, C. M. 1874. The Marine Mammals of the Northwestern Coast of North America, Together with an Account of the American Whale-Fishery. 319pp. (復刻版: Dover Publications, New York. 1968.)
- 船舶部会「横浜」船舶史稿編纂チーム n.d. 船舶史稿 資料編 輸入船船舶史第 2 巻 (明治後期編).
- 写真集懐かしの千島編纂委員会 1981 写真集懐かしの千島. 国書刊行会, 東京. 220pp.
- 渋谷辰三郎 1967 捕鯨回顧. 私家版, 長崎. 139pp.
- 逋信省管船局編 1899, 1908, 1910, 1916, 1927, 1938, 1939 日本船名録 明治 32, 41, 43 年, 大正 5 年, 昭和 2, 13, 14 年
- Terry, W. 1950. Japanese whaling industry prior to 1946: Natural Resources Section Report no. 126. 47pp. General Headquarters Supreme Commander for the Allied Powers Natural Resources Section, Tokyo.
- 徳山宣也編 1992 大洋漁業・捕鯨事業の歴史. 私家版, 福岡. 821pp+3.
- Tønnessen, J. 1967. Verdensfangsten 1883–1924, Del 1 1883–1914: Den Moderne Hvalfangsts Historie Bind 2. 618pp., Norges Hvalfangstforbund, Sandefjord.
- 宇仁義和 2016a 日本の近代鯨類学草創期における東洋捕鯨とアンドリュースの影響. 日本セトロロジー研究, 26: 17–25.
- 宇仁義和 2016b 社内文書に見る東洋捕鯨の事業場. 下関鯨類研究室報告, 4: 12-35.
- 宇仁義和 2017a 千島の近代捕鯨—択捉島と色丹島を中心に. 根室市歴史と自然の資料館紀要, 29: 31-44.
- 宇仁義和 2017b ノルウェーに保存されていた 20 世紀初頭の朝鮮半島沿岸の捕鯨の写真. 日本セトロロジー研究, 27: 9–16.
- 宇仁義和・加藤幸治編 2017 ロイ・チャップマン・アンドリュースの鯨類調査—鮎川 1910 年. 東北学院大学論集歴史と文化, 55: 43–179.
- 山下涉登 2004 捕鯨 II (もの与人間の文化史 120). 法政大学出版局, 東京. 300pp.